2019年度　Let's びぎんプロジェクト　活動報告書

No.	プロジェクト名	掲載頁
1	消費から野生動物の未来を変えるプロジェクト	1-11
2	植物標本大撮影プロジェクト ～岩大ミュージアムに眠る 10 万点の植物標本をデジタル展示に～	12-17
3	iwate to Taiwan　岩手-台湾間イン・アウトバウンド促進プロジェクト	18-21
4	岩大発・ソフトテニス地域スポーツクラブ	22-26

2019 年度 Let’s びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：消費から野生動物の未来を変えるプロジェクト

１．構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

No.	氏名	学部	学科課程	学年	備　考 （役職担当等）
1	中嶋慧介	農学部	共同獣医	4	代表
2	高井雄也	農学部	共同獣医	4	副代表
3	荻野史織	農学部	共同獣医	4	広報
4	小野豊佳	農学部	共同獣医	3	企画リーダー （ヤマネコ企画）
5	吉田茉優	農学部	共同獣医	3	企画リーダー （シンポジウム）
6	宇佐見ひな	農学部	森林科学	3	企画リーダー （FSC 認証企画）
7	武山栞	農学部	森林科学	2	広報
8	桜田優衣	農学部	森林科学	1	
9	今井里穂	農学部	共同獣医	1	
10	城間未唯	農学部	動物科学	1	
11	松崎有希	農学部	動物科学	1	
12	飯田日南	農学部	動物科学	1	
13	佐藤志優	農学部	動物科学	1	

２．活動目的

◎持続可能な生産品に対する認知向上
持続可能な生産品としてツシマヤマネコ米/FSC 認証製品を取り上げ、その販売・配布を通して「持続可能な生産品」の存在の普及を図り、購買行動（投票）の選択肢を増やす。

◎野生動物保全に関する認知向上
ツシマヤマネコ米・FSC 認証製品を通して、製品に対してより強い関心を持ってもらうと共に、現在の野生動物保全について知ることのできるきっかけを作る。

◎持続可能な野生動物保全について考える場の提供
ツシマヤマネコ米の購入や FSC 認証製品を身につけることをきっかけとして、ツシマヤマネコやイヌワシだけでなく、その他多くの絶滅に瀕する動物について関心を持ってもら

い、彼らとの共生の形を考える場を提供する。

◆すべてはプロジェクトメンバーを含めたより多くの消費者に**持続可能な環境保全に繋がる、消費の選択肢を増やすこと**を目指す。

３．活動の経過・内容

３-１．活動内容

①　ツシマヤマネコ米配布企画

・　おにぎりを屋台として出店。
・　屋台の外観は、より多くの方の目がとまるように、プロモーションの一環として看板や装飾を取り付け、ツシマヤマネコの保全状況を記載したパネルを設置し、野生動物保全に関したブースを作った。
・　商品名は「野生動物の生息地と盛岡を繋ぐ“お結び”」とし、おにぎりの具材は盛岡市産（岩手県産）のものを使用して長崎県対馬と盛岡（岩手）のコラボレーションを表している。
・　購入者には商品と共に、ツシマヤマネコに関する情報を記載したリーフレットをお渡しした。
・　目的達成の評価方法については、リーフレットを配布した枚数、おにぎり購入者に、パネル・リーフレットを読んだ感想と意識の変化を訪ねた。

＊ツシマヤマネコ米とは

ツシマヤマネコは、長崎県対馬にのみ生息する絶滅危惧種で、その生息環境は水田が主。激減した原因の１つが、生息環境（水田）の減少である。水田の減少は、そこを住処とするネズミやカエルなど、ツシマヤマネコの餌となる動物の減少を意味する。ツシマヤマネコの生活の場を守るため、環境に配慮した水田で作られたのがツシマヤマネコ米である。また売り上げの一部はヤマネコ保全に当てられる。したがって、この米を選び、購入し、ツシマヤマネコの存在と共に広めることがツシマヤマネコ保全に繋がると考えている。

②　動物関連書籍展示ブース

・　10 月 4 日が「世界動物の日」であることを記念して、岩手大学図書館と岩手大学生協購買にて書籍ブースを設置した。
・　プロジェクトメンバーが選んだ、野生動物、伴侶動物、産業動物、実験動物など動物関連する書籍を展示した。
・　ポスターや一部の書籍には POP を作成した。

③　イエネコ適正飼育シンポジウム

・　シンポジウム「ネコの未来を考える会」を開催。
・　講師に、動物園・環境 NPO にて勤務経験のある岩手大学農学部共同獣医学科准教授、保護猫カフェもりねこ理事長にご登壇いただき、野生動物とヒトとネコが共に幸せに生きる道についてお話しいただいた。
・　一般社団法人未来を創るどうぶつ医師団との共催。

④　FSC 認証木製ネームプレート開発企画

・　FSC 認証を受けた木材を用いてネームプレートを開発した。
・　ネームプレートは 2020 年度岩手大学農学部動物科学科・森林科学科新 2 年生に配布予定。
・　配布と共に FSC 認証、生物多様性保全、持続可能な森林保全に関するリーフレットを配布。
・　FSC 認証に関するポスターの設置。
・　ネームプレート配布時に同封するアンケートを利用し、本企画によって得られた FSC 認証制度に対する理解度や考え方の変化を調査・統計処理する。（2020 年 4 月）

３-2．活動の経過

9 月下旬～10 月上旬：マーケティング期間（ツシマヤマネコ米販売企画準備）

✓　岩手大学学内で試食会を行いながら、おにぎりの味/見た目/プロモーションを決定していった
✓　ツシマヤマネコのリーフレットの作製
✓　屋台に設置するツシマヤマネコの保全状況を記載したパネルの製作
✓　屋台における野生動物保全に関したブースの製作
✓　より多くの方の目を引き、パネルを読んでもらえるような屋台の外装の製作

9 月 30 日-10 月 23 日：動物関連書籍展示ブースの設置

10 月 26-27 日：不来方祭出展

✓　屋台形式でツシマヤマネコ米と岩手県産の具材で作ったおむすびを無料配布した。
✓　ツシマヤマネコの保全状況を記載したリーフレットの配布、パネルの設置
✓　野生動物保全に関するブースの設置

12 月 8 日：イエネコ適正飼育シンポジウムの開催

✓　岩手大学銀河ホールにて開催

12 月下旬-3 月上旬：FSC 認証木製ネームプレート開発

✓　FSC 認証製品取扱業者に木製ネームプレートを発注
✓　岩手大学農学部新 2 年生を対象にして、ネームプレートを配布
✓　FSC 認証、生物多様性保全、持続可能な森林保全に関するリーフレットを作成

4. 結果報告

① ツシマヤマネコ米配布企画

試食会にはのべ 118 名、不来方祭にはのべ 465 名、合計 583 名の方々にご参加いただいた。来店者へのアンケート（来店者 52 名を対象）では「ツシマヤマネコ米を初めて知った」と答えた方が 92.3%であり、企画目的を達成できたと考えている。来店された方からは「ツシマヤマネコの存在を初めて知りました（社会人）」「消費と環境保護どちらもできる活動があることを知ることができた（大学生）」「お米が美味しく感じた。お金だけではなくて環境にいいものを選ぶのも良いと思った（大学生）」「動物と自分の食べるものの繋がりの印象が変わった（社会人）」などの声を頂いた。

② 動物関連書籍展示ブース

展示書籍数は 29 冊、そのうち貸出件数は 16 冊であった。利用者の方からは「書店に並んでるような新しい本もあった。ちょうど読みたいと思っていた。（農学部准教授）」「10 月 4 日が世界動物の日とは知らなかった。こんな記念日があると知れて良かった。（人文社会学部 2 年）」などの声を頂いた。また、「一時期、多く貸し出されていて何も置かれていない期間があったので、書影（本の表紙の写真）などを設置しておくと良いのでは。（図書館職員）」「選書リストを置くのも一つの手ではないか。（図書館受付）」といった反省も頂いたので、今後の活動に生かしたい。

③ イエネコ適正飼育シンポジウム

30 名の方にご参加いただき、シンポジウム後のアンケート（参加者 15 人）では満足度 9.80（10 段階評価）の高評価を頂いた。「シンポジウム前と後で意識として何か変わったことがあるか」というアンケートに対しては、「野外のイエネコは地球最強の侵略外来生物であり、その根拠はネコを飼っている人は全員知っておくべき」「TNR が野生動物を守ることに繋がっていないという事実、感情論だけでは問題の解決にはならないとわかった。」「地域猫は良い活動だという認識から、それが続く状況は褒められたものではなく最終的にゼロにならなければならないという認識に変わった。」「ネコの完全室内飼育の大切さがわかった。」という声を頂いた。

「事前にイエネコと野生動物の関係性について知っていたか」という質問に、「いいえ」と答えたのが 53.3%、「事前にイエネコの適正飼育について知っていたか」という質問に「いいえ」と答えたのが 73.3%であったにも関わらず、上記のような声を頂いた。

④ FSC 認証木製ネームプレート開発企画

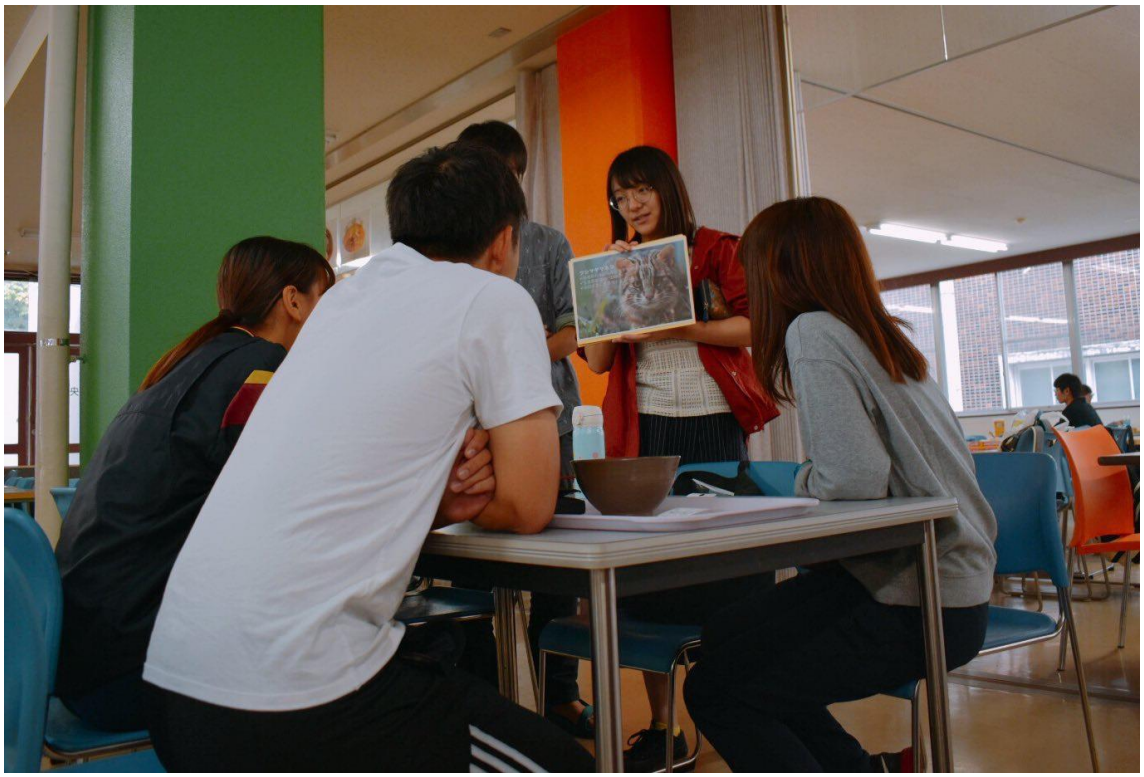
2020 年 3 月現在では、ネームプレートの開発を完了し、リーフレットと共に同年 4 月に対象者に配布予定である。ネームプレート配布時に同封するアンケートを利用し、本企画によって得られた FSC 認証制度に対する理解度や考え方の変化を調査・統

計処理する予定。

5. 今後の活動

今後は、プロジェクトメンバー各々が所属する岩手大学自然系・動物系サークルに、この度得られた反省を持ち帰り、継続・発展していく予定である。ツシマヤマネコ米の配布企画は、不来方祭のみではなく、新たなイベント開催などの機会を作っていく。書籍の展示ブースは、好評を頂いたため今後も定期的に続け、学外にも展開していきたい。

6. 活動写真



（食堂内での試食会の様子：食堂を利用していた学生に試作品を食べてもらった）

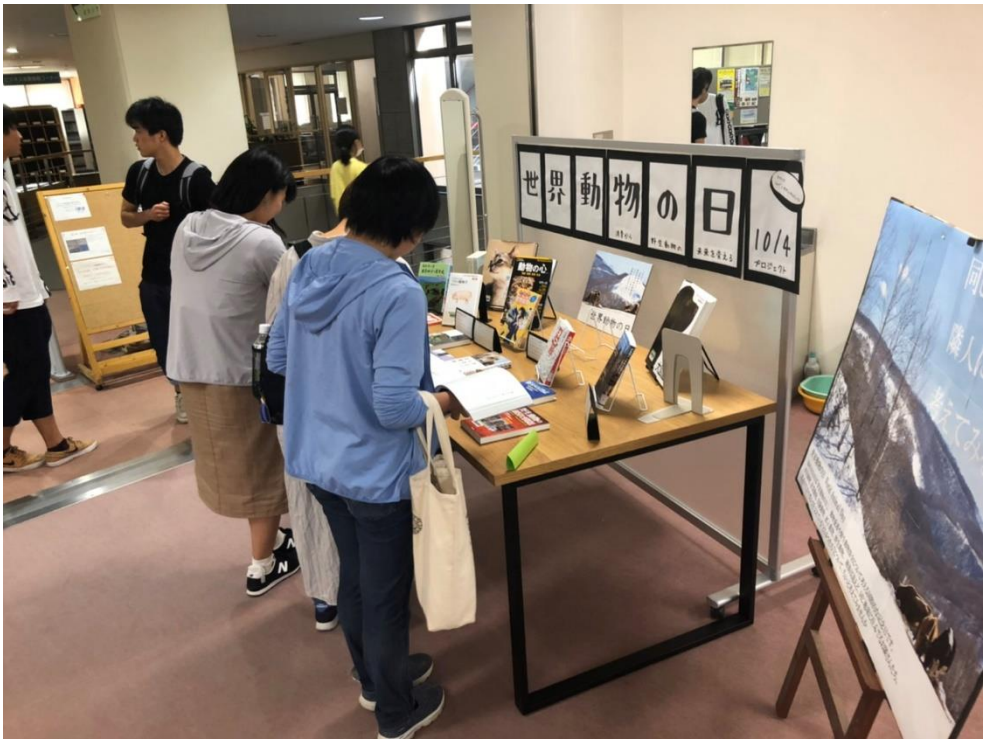
（大学祭当日の様子：お結びを食べてくださった方々にメンバーがお話ししている）

（大学祭当日の様子：ツシマヤマネコ等身大の模型を作成した）

（試作品の野生動物の生息地と盛岡を繋ぐ“お結び”：
ツシマヤマネコ米と岩手県産の栗を使用している。）

（岩手大学図書館に設置した動物関連書籍展示ブース）

（岩手大学生協購買内に設置したブース）



（展示期間中のブースの様子）

（イエネコ適正シンポジウムの様子）

（休憩時間にはツシマヤマネコ米を使った“お結び”を食べていただいた）

（完成した FSC 認証木製ネームプレート）

この度は、多くの方々にご協力・ご指導・ご支援をいただきながら約 1 年間の活動を続けることができました。この場をお借り致しまして御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

2019 年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：植物標本大撮影プロジェクト

～岩大ミュージアムに眠る 10 万点の植物標本をデジタル展示に～

１．構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

No.	氏名	学部	学科課程	学年	備　考 （役職担当等）
1	押切智博	大学院	総合科学研究科	修士１年	代表
2	中川祐太	大学院	総合科学研究科	修士２年	副代表
3	小室芽依	農学部	森林科学科	３年	副代表
4	大竹崇寛	大学院		博士１年	
5	久門美月	大学院	総合科学研究科	修士２年	
6	齋藤優気	農学部	共同獣医学科	４年	
7	佐野広之	農学部	植物生命科学科	４年	
8	北島ちひろ	農学部	共同獣医学科	３年	
9	鈴木恭平	農学部	応用生物科学科	３年	
10	相澤葵	農学部	共同獣医学科	３年	
11	嵯峨昌洋	農学部	共同獣医学科	３年	
12	柳沼祐亮	農学部	共同獣医学科	２年	
13	森山優海	農学部	共同獣医学科	２年	
14	穂刈裕一	農学部	森林科学科	２年	
15	加藤その子	農学部	森林科学科	２年	
16	渡邉颯太	農学部	森林科学科	２年	
17	内橋春香	農学部	動物科学科	１年	
18	千田早咲	人文社会科学部	人間文化課程	１年	
19	会田裕雅	農学部	森林科学科	１年	
20	齋藤楓華	農学部	森林科学科	１年	
21	高畑辰彦	農学部	森林科学科	１年	
22	橋本卓拓	農学部	森林科学科	１年	
23	山本波知	農学部	応用生物化学科	１年	

2. 背景

岩手大学ミュージアムには、盛岡高等農林学校時代に収集された、1880 年代の植物標本を含む、合計約 10 万点の植物標本が収蔵されている。これらの標本群は岩手県の植物史を知る上で非常に重要な標本である。

古い標本は戦災で消失しているなど、全国的にも貴重である。また盛岡高等農林学校時代から岩手大学が収集してきたという点からも、これは岩手大学の無二の財産である。

しかしそれらがミュージアムに存在することは、学内関係者にもほとんど知られていな

い。また収蔵されている植物標本は現在、データベース化作業および一部の展示が行われているものの、その数多さから作業が難航しており、収蔵されている植物標本の全てについて公開、活用がなされているわけではない。

そこでミュージアムに収蔵されている貴重な植物標本を記録・保存し、その存在や価値について広く公開していくための活動を企画した。

3. 活動目的

主目的：多くの人に、岩手大学ミュージアムに収蔵されている植物標本の存在を知ってもらい、またその価値と魅力を伝えること。

副目的①：岩手大学ミュージアムにおける博物館活動の活性化および利用の促進に資すること。

副目的②：盛岡高等農林学校時代から続く岩手大学農学部の歴史を踏まえ岩手大学、農学部、ミュージアム、農業教育資料館のイメージアップに繋げること。

4. 活動の経過・内容

現在まで実施した内容は、以下の通りである。

○活動スケジュール

8 月：兵庫県立人と自然の博物館学芸員の方と話し合い

9 月：学術情報課との話し合い。

10 月：撮影画像についてのレクチャーおよび撮影機材の設置。画像撮影開始。

11 月：カメラレンズの不調により撮影中断。同月後半に代替機と交換し再開

12 月～2 月：撮影の継続。

3 月：最終報告会。

4－1. 活動内容の詳細

本プロジェクトでは目的の達成のため、以下の 3 点の活動を予定していた。

①岩手大学ミュージアム植物標本画像の撮影

②撮影画像を使った展示の作成

③撮影画像を用いたオリジナルグッズの提案

このうち②・③は実施できなかったため、以下①についてのみ詳細を記入する。

（②・③については **5. 結果報告**の欄に記載する。）

岩手大学ミュージアムに存在する植物標本の活用に向け、本プロジェクトでは特定非営利活動法人フィールドの堀内保彦氏および兵庫県立人と自然の博物館の学芸員の高野温子

氏らが実践している方法を参考にし、撮影機材の設置および植物標本画像の撮影を行った。また機材の設置と植物標本の取り扱いについて、この 2 名の助言を得ながら作業を行った。なおこの方法については、2019 年に論文として発表されている*。

機材は堀内氏に相談して購入した後、岩手大学ミュージアム企画展示室に運びこみ、設置を行った。機材設置後は堀内氏から撮影器材および植物標本の取扱い等についてレクチャーを受け、撮影を開始した。

設置は 10 月 15 日に行い、以降メンバーでシフトを組み、交代で作業を行った。作業は 2～3 人で行い、一回当たり授業一コマ分（約 100 分）を目途にほぼ毎週、平日に撮影を行った。　撮影した画像は当初パソコンの HDD に保管していたものの、データの安全性の向上及び今後の利用を簡便にするため、途中から Synology Diskstation DS118（NAS）へデータを移動した。

11 月は器材の故障のため撮影を行っておらず、同月後半から撮影を再開した。以降撮影は 2 月 28 日までの、テスト期間を除くほぼすべての平日に行った。

4－2. 撮影のペース

高野ら*によると、1 日（9 時－17 時）2 名体制で、平均 571 点の植物標本を撮影できたという。本プロジェクトでは、ミュージアムの開館時間が 10 時－15 時と短いこと、多くの学生が入れ替わり作業するので、慣れによる作業の効率化が期待できないことなどから、1 日の撮影枚数を 200 枚程度と仮定し、毎月 1000 点の標本撮影を目標とした。

5. 結果報告

植物標本の撮影について、設置から現在までの約 5 か月間でおよそ 3000 点の植物標本画像を得ることができた。これは当初の予定であった撮影 1 万点より大幅に少なく、ミュージアム所蔵植物標本の 3%ほどである。しかしながら 11 月の機材トラブルおよび学生が慣れるまでの期間を考慮すると、実際に撮影を行えたのは 3 か月ほどであった。作業についても、植物標本の一部に欠損・虫害が見られるなど、想定していなかった問題が多く浮上し、その対応に追われたことも撮影が遅れた要因の一つである。今後メンバーの習熟や作業手順の定着を図ることにより、目標である月 1000 点の撮影は十分に達成可能であると考えられた。

②・③について

②について、得られた植物標本の画像データを、ミュージアムの来館者が閲覧できるような仕組みを作りたいと考えていた。現在でも、ごく一部のものを閲覧できる展示があるが、画面が小さく、また目立たないものであるため、より魅力的な展示とする必要があると考えた。しかし撮影機材が予定よりも高くつき、展示作成へ回せる予算が心もとない状況であった。また撮影画像を用いた展示の作成については、メンバーが植物の知識に乏しいため、展示案作成までのハードルが非常に高かった。これらの理由から今回のプロジェクトでは満足した成果を残せないと考えたため、活動を見送った。

③については例えば、綺麗な状態の植物標本画像を印刷したクリアファイルや、季節の植物画像を印刷したカレンダーなどを予定していた。しかし標本に付けられたラベルの確実性が担保されていなかったことから、グッズの作成は行わなかった。

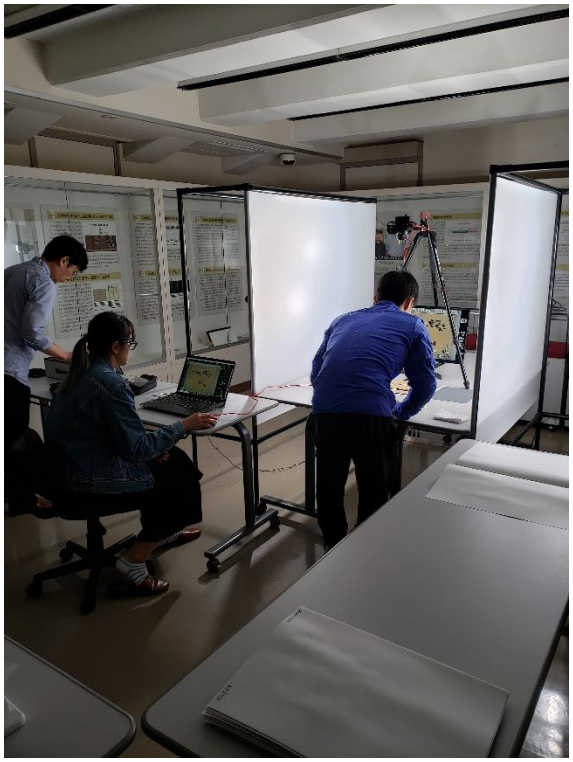
6. 今後の活動予定

予定していた活動のうち①については撮影機材の設置および撮影を行うことができ、ある程度目標を達成できた。しかし②・③に関しては本年度での達成ができなかった。従って来年以降は撮影の継続と共に、撮影した画像を用いたミュージアムの PR・活動の促進に向けた取り組みを行っていく必要がある。

7. 活動写真

撮影機材

組み立ての様子



機材を用いた撮影の様子

撮影した標本画像

8. 参考文献

*Atuko Takano, Yasuhiko Horiuchi, Yu Fujimoto, Kouta Aoki, Hiromune Mituhashi, Akira Takahashi (2019)：Simple but long-lasting：A specimen imaging method applicable for small- and medium-sized herbaria, PhytoKeys 118：1-14pp

2019 年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：

iwate to taiwan

岩手-台湾間イン・アウトバウンド促進プロジェクト

＜報告書必須記載事項＞

１．構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

氏名	学部	学科課程	学年
吉永　圭吾	農	植物生命科学科	3
飯野　雄飛	農	植物生命科学科	3
月舘　花菜	人文社会科	人間文化課程	3
山城　美緒	人文社会科	人間文化課程	3
玉木　穂香	人文社会科	地域政策課程	3
三浦　彩	文	児童教育学科	4
佐々木　孝徳	総合政策	総合政策学科	3
齋藤　芽翠	農	応用生物化学科	1

２．活動目的

岩手、台湾間のイン・アウトバウンドの促進をはかることにより旅行者の往来を活発化することで観光産業を盛り上げる。

３．活動の経過・内容

5 月　団体設立

6 月　イベント開催 in ブックカフェ

→当団体の認知拡大、アウトバウンド促進を目的に地域住民へ向け、台湾発信イベントを開催。参加者は 30 人ほどで、実施後のアンケートから台湾への関心を集めることができた様子であった。

SNS 設立

台湾人インターン生との交流

→旅館への台湾人インターン生へのヒアリングを通して台湾の理解を深めた。

7 月　学生アンケート実地

→県内学生約 80 名から海外旅行、台湾に関するアンケートを集めた。海外旅行をしない主な要因は「きっかけがないこと」であると判明した。

8 月　現地視察

→実際にメンバー全員が台湾へ訪れ、若者の観光客として台湾を体感

9 月　リトルプレス制作開始

→現地視察をもとに、「きっかけをつくる」手法としてリトルプレスの制作を開始した。

10 月　学祭出店

→台湾の認知度を上げる取り組みとして、台湾の伝統的料理を販売

11 月　地域クラウド交流会出場

→当団体の認知を地域住民に広めるために参加。結果最も支持を集められた。

12 月　県、花巻空港職員へのヒアリング

→リトルプレスを効果的なものにし、地域連携を計るためのヒアリング。アウトバウンド促進へ向け、当団体と協力していただけることになった。

台湾人ヒアリング

→地域とゆかりのある台湾人への取材をリトルプレスに活用

1 月　リトルプレスデザイン交渉

→地域連携を計るため、県内デザイン会社、専門学校の学生にデザインを依頼

2 月　リトルプレス草稿完成

3 月　リトルプレス本稿完成

→時期を見て、リリースイベントを企画予定

４．結果報告

岩手県の若者をターゲットにアウトバウンド促進を目指し、イベント、リトルプレスといったアプローチを通して活動した結果、県、空港、台湾人、県内住民、学生と連携してアウトバウンドの機運を醸成できた。

５．今後の活動予定

活動の中で完成させたリトルプレスの第二弾を作成することを計画しており、これにより今後もアウトバウンド促進と地域連携を図っていく。

６．活動写真

みやげ処
みやげ処
台湾
台湾

2019 年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：岩大発・ソフトテニス地域スポーツクラブ

＜報告書必須記載事項＞

１．構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

No.	氏名	学部	学科・課程	学年	備考 （役職担当等）
1	高橋　郁成	大学院	総合科学研究科	1	代表
2	三宅　勇希	教育学部	学校教育教員養成課程	4	副代表
3	鈴木　綾華	大学院	総合科学研究科	1	広報
4	工藤　唯	農学部	応用生物化学科	4	
5	本堂　桜花	教育学部	学校教育教員養成課程	2	会計
6	小笠原　未久	人文社会学部	人間文化課程	2	

２．活動目的

●岩手県内（特に盛岡地域）でソフトテニスの地域スポーツクラブへ移行を進める。

そのために今年度は以下を重点的に行っていく。

①来年度以降のスポーツ少年団として活動するために指導資格の取得。

※スポーツ少年団設立要件 a.指導資格者２名以上　b.参加少年 10 名以上

②参加大学生の指導力向上

③多くの人の交流を目指したソフトテニス練習会の実施

３．活動の経過・内容

7 月：・資格取得のための勉強会

●学生指導者の指導技術の質の確保のため一定数の資格取得を目標とする。

①20 歳未満の学生は、日本スポーツ協会公認の「スポーツリーダー」の資格を取得する。

②20 歳以上の学生には、日本スポーツ協会公認「コーチ１（ソフトテニス）」の資格を取得する。

8 月：・講習会の補助活動

陸前高田市、久慈市開催の講習会の補助を行った。地元中学校顧問と今後の活動にいて意見交換を行った。

9 月：・11 月開催予定の講習会について、地元指導者とミーティングを行い、今後の予定について話し合った。講習会は八幡平市で開催し、講師に日本代表選手 1 名を招待する。

10 月：指導資格講習会参加（秋田県秋田市）

11 月：先述の講習会開催

指導資格講習会参加（秋田県秋田市）

12 月：盛岡市練習会実施（岩手県営体育館）計 1 回実施
　　実施に際してポスター作製・SNS での広報を行った
1 月：盛岡市練習会実施（岩手県営体育館・岩手県営武道館）計 3 回実施
2 月：盛岡市練習会実施（岩手県営体育館）計 1 回実施・計 1 回企画・中止（コロナウイルス拡大防止のため）
3 月：盛岡市練習会企画（岩手県営武道館）計 2 回企画・中止（コロナウイルス拡大防止のため）
　　岩泉練習会企画・中止（コロナウイルス拡大防止のため）

４．結果報告

目標の達成について述べていく。

①指導資格の取得

今年度は二名の参加大学生が指導資格の講習会に参加し、資格の取得申請を行った。スポーツを安全に行い、多様な目的のためにスポーツを行うことの意義、必要性について知識を得た。

一方でスポーツ少年団の最小参加少年数の 10 名の確保は達成しておらず、来年度に向けた課題となっている。

②参加大学生の指導力向上

各講習会に参加し、補助を行うことで指導力の向上を試みた。

また先述の指導資格の講習をうけた学生主導により、プロジェクトチーム内の勉強会を行った。後述の練習会で指導の実践の場として、技能の向上に努めた。

③練習会の企画

盛岡市内での練習会の企画を 8 回行い、コロナウイルス拡大防止のため 3 回は中止になってしまったが、5 回実施することができた。広報としてポスターの作成・SNS での参加呼びかけを行った。なお来年度の活動の資金確保のために、参加費として 500 円を徴収した。練習会開催初期は参加者が少なかったが徐々に参加者が増え、中止した分も含めると延べ 50 名ほどが参加・参加予定だった。参加者はほとんどが中学生だったが、中学生の保護者、岩手大学生 OB や岩手大学外国人研究者も参加していただいた。

岩泉町での練習会を岩泉町ソフトテニス協会と共催で企画した。なお、コロナウイルス拡大防止のため中止になった。広報は岩泉町ソフトテニス協会の方に協力してもらい、小・中・高生に加えて大人の合計 30 名ほどが参加予定だった。今回は参加費を頂かない予定だった。

盛岡市・岩泉町双方で中止になってしまった練習会もあったが参加中学生・その保護者からの良い意見をもらった。大学生と触れ合う機会は少なく、良い刺激になっていたこと、岩手大学に入りたいと言ってくれる中学生もいた。この意見をもらうことでプロジェクトメンバー内のモチベーション向上につながった。地域貢献としての役割をはたすことができたと考えられる。

一方で練習会の参加者の多くは中学生であり、偏りが見られた。多世代の参加を促すことは来年度の課題である。

５．今後の活動予定

来年度以降も練習会を企画していく。中止になってしまった岩泉町での練習会は実施させたい。また多様なニーズ（たとえば競技力向上を目指す人、レクリエーション目的の人など）のすみわけを行って、参加しやすくすることも行いたい。その中でスポーツ少年団の設立も目標に参加少年の確保を行う。

また、大学生の指導力向上も行い、講習会等の参加・指導資格の取得を行う。

既存の地域スポーツクラブと連携し、地域のスポーツ文化向上と、岩手大学の地域貢献を高めていきたい。

６．活動写真